

## 1930年代における階級的教育労働者の 運動についての調査（その2）

—宮崎県都城地方の教育労働者の組織と活動の実態—

岡 本 洋 三

A Survey on the Education Workers' Movement in the 1930s. (II)

Hiromi OKAMOTO

### はじめに

本報告は、さきに本紀要第27巻（1976・3）に発表した「日向新興教育研究会と全協・日本一般使用人組合教育労働部南九州支部について」の調査報告の続報である。前報告以降この運動に関する新しい資料<sup>1)</sup>に接しその運動の実態をかなり明らかにすることができたので、あらためて運動の生成、展開の事実経過とその活動内容を中心にまとめて報告する。時系列にそって叙述する関係上、前報告で既に述べた事柄と若干重複することは避けられないが前報告で紹介した資料や事柄の内容についてはできるだけ重複しないように省略した。そのため事実経過のなかで当然詳しく説明すべき事柄でも前報告で紹介したものについては記述が省略されたり、その事実の客観的な意義にくら

\* 1976年11月6日受理

- 1) 今回の調査報告で主に検討したのはこの事件関係者の警察調書である。それは中村圭吾氏所蔵の「宮崎県下ニ於ケル思想事件関係者聴取書」で氏の御厚意で被見することができた。ここに謝意を表したい。この資料について若干解説して、この調査報告の記述内容についての予備的な判断材料としたい。この調書は、この事件に関連して取調べをうけた被疑者14名、関係者27名、計41名の警察での聴取書の綴りである。事件関係の一括書類として目録つきの謄写刷のものであり、その目録に記載されてある聴取書はすべて揃っている。しかしこれが事件関係者全員の調査綴りとは思われない。一例をあげれば、この事件で最初の段階で検挙された組織のメンバー永井登美の調書がこれには含まれていない、またこれもメンバーである宮崎百太郎の調書はこれだけが警察のものではなく検事局のものである、などの問題があるからである。そのような点はあるが、ともかく取調べをうけた関係者のほぼ全員の調書である点で、この運動についての重要な資料である。調書に記載されている供述内容は各人によって随分くいちがっている点が多い。従ってそれらの相互にくいちがう供述のどれを採るべきかは重大な問題である。本来ならばそれらの記述を整理・対照してそのいずれを採用するか論拠を示すべきであろうが、紙幅の関係でその手続をすべて省略し、筆者の判断の結論のみを示した。参考までに付言すると、共通した供述が真であるとは単純に云えないのがこの種の資料の根本的な問題点である。治安維持法体制の下で特高警察が治維法違反に追い込むべく筋書をつくりそれに適合するように「供述」を強制しているのだから、その強制が明白に読みとれるような「同一」の供述内容にぶつかることが多いのである。また「供述していない」ということと「そのような事実が存在していなかった」ということを見わけることもはなはだ困難である。本報告も当然この調査に記述されている範囲で事実経過をまとめざるを得なかったのだから、重要な事実が脱落している可能性はある。その点、この報告がこの運動の概要として記しているのは、あくまで「知り得た限りで、ほぼ確かと思われる部分」の報告にとどまるものであることも念のためつけ加える。

べて簡単な記述に終わってしまうということも生じていることをあらかじめおことわりしておきたい。また紙幅の制約で、明らかになっている問題でこの報告に書ききれなかった事柄も多い。そのこととも関連しているのであるが、事実経過を主とする報告といいながら本文の記述には「ようである」という推測部分が多いことについてふれておきたい。この推測部分の多くは、事実の相互のつながりや因果関係・意味づけなどの解釈の部分であって、事実の存否・記述された事実内容を推測して書いているものではない。関係者の供述などの資料をそのまま示しながら事実経過を究明するという方法がとれなかったために、その推測がどこまで及ぶのかが表現上若干不明瞭になったが、事実的部分にはそれに附合する関係者の供述（それが正しいかどうかは別として）が存在し、それにもとづいて記述されている。

この戦前運動について調査する趣旨に若干ふれておきたい。この運動が行なわれた時代からすでに半世紀になろうとし、この戦争とファシズムの時代・治安維持法体制の時代を知らない人々が大多数となっているが、当時の時代の真実はかならずしも十分に明らかにされてはいない。今日知られている事柄にもあの時代を支配していた政治的な作為と偏見によって歪められたまま、あたかもそれが「事実」であるかのように定着しているものが多い。ところで今日我々が歴史的事実としてうけとめている事柄は、無数の事実から一定の観点で選択し評価し意味を与えた事柄であるが、その選択・評価、意味づけは選ばれなかった無数の事実を全く無視したのではなくそれとの対比や結びつきのなかで行なわれたものである。したがって今日われわれがこの過去の事実について再検討しようとするには、その対象それ自体はもちろんであるがそれがその中から選択されたであろう他の多くの事実をも含めて行なわれなければならないだろう。そのために、まず関係事実——その多くは埋もれたまま失われようとしている——を掘りおこし記録にとどめておくことが必要であろう。

この過去の運動の事実の掘りおこしと記録という仕事の内容を、その活動や組織運動の成果として特筆すべきものやその理論・思想において注目し値する内容をもっているものにとどめてはならないと考える。特筆すべきほどでない平凡なありふれた活動であってもそれが運動の実質を構成しているものであるかぎりできるだけ具体的に記録されることが大切だと考える。それは運動はそのようなとりたてて評価するにあたらぬような平凡で日常的な活動の集積に支えられきずかれていますからである。運動が発展するか衰滅するかはそのような平凡で日常的な活動が保持されるか否かにかかっているとさえ云いするのである。（たとえば、人々が集まり、話しあい、連絡をとりあうという活動である）これはとくにこの治安維持法の時代の内実、その時代の運動の理解のためには大切である。本文にみられるように、この都城の運動は科学的社会主義の思想に学んで科学的なものの見方で社会と教育について考えるようになった教師たちを中心とする、反戦平和と科学的真実を追求する教育の研究と実践の努力であり、そのための仲間づくりの活動であり、当時の閉ざされた文化状況においてひろく知的文化的欲求を育て発展させる文化運動であった。そのどの活動を取りあげても、かの希代の悪法といわれる治安維持法によっても犯罪となしえない（この事件で治

維法違反による起訴は皆無である)ものであった。それにもかかわらずこの運動は特高警察によって弾圧され、40数名の多数の教師や市民が検挙あるいは取調べをうけ、職を追われ社会的に圧迫された。治安維持法体制とは、治維法に法的に違反していなくても権力の欲するままに人民を弾圧できるという体制なのである。そして権力が抑圧しようとしたのは、治維法が法の明文において示した共産主義運動だけではなく、人民の自主的な運動すべてであった。それは一見ささやかな、とるにたらしめように見える運動のなかにも、やがて大河となって戦争とファシズムの体制をうちやぶる力に発展する芽が含まれているからである。この点において事態の発展可能性にたいする権力の認識は「正確」であったといえることができる。この都城の運動——それはわずかに8ヶ月の期間にすぎなかった——においても、その発展可能性は明らかに成長していたのである。

### 1. 「日南新興教育研究会」<sup>2)</sup>の結成まで

この運動は、都城市とその周辺の小学教員を中心とする社会主義運動であるが、それは中央大学生津曲武治・都城市大王小学校訓導山元都星雄・北諸県郡中郷村梅北小学校訓導横山巖・同郡沖水村祝吉小学校代用教員小山光の4名によってつくられた研究会からはじまった。

津曲武治は、本籍・沖水村大字郡元、明治41年生、資産見積り1万円という地方では中位以上の家の三男であった。祝吉小・都城中学を経て中央大学に入学、当時<sup>3)</sup>法学部二年。東京に出てから現社会制度の矛盾を感じ、社会科学的研究に関心をよせるようになり、昭和5年11月頃大学の社会科学研究会に入会して活動、6年4月末頃日本共産青年同盟(共青)に加盟したという。共青では「無産青年」の配布や読者拡大、「戦旗」の発送などの活動をし、また都城地方に社会主義運動を組織しその連絡指導にあたる任務をもっていたようである。彼は6年6月頃健康を害し療養のため帰郷し、7月中旬再び上京し運動に復帰するが、この間都城に運動の芽をつくるため知人友人と連絡をとり働きかけた。郷里の友人山下満彦・中原重躬<sup>4)</sup>・黒木フジ<sup>5)</sup>・津曲桃子<sup>6)</sup>などを通じて農村青年や製糸女工の組織化をはかり、横山を通じて教員の組織化をめざした。津曲が横山との接触を計ったのは、4～5年頃の夏休みに母校の祝吉小に遊びに行き、当時同校の教員であった横山と親しくなり、横山が社会主義的思想を持っていることを知っていたからである。この津曲と横山との結びつきがこの運動の直接の端初であった。横山から運動の同志となる可能性のある人物として小山や山元の名前がでて、津曲は早速これらの人々を訪ね、その考え方を確かめて、運動をよびかけていった。

- 2) 前報告では山元証言により「日向新興教育研究会」としたが、その後の調査の結論として「日南」に改めた。
- 3) ここで当時というのは、検挙・取調べの時、すなわち昭和7年3月21日～のことである。年齢なども聴取書を資料としているので、昭和7年時点でかぞえている。
- 4) 本報告では触れることができなかったが農民運動と津曲との接点に位置する人物、当時21才、農業。
- 5) 都城の製糸女工の組織化において津曲に協力した女性・当時24才、製糸工場教婦。
- 6) 都城の製糸女工の組織化において津曲に協力した女性、武治の家とは親族同様に交際していた。当時20才、製糸工場セレプレレン係工。

横山 巖は、本籍・宮崎郡清武村大字今泉、明治38年生、当時28才でこの運動の主要メンバーの最年長者である。資産見積り2～3万円という田地・畑・山林を所有する上層農家の長男で戸主であった。清武村大久保小・宮崎中学卒業、1年間母校大久保小で代用教員をしたのち慶応大学法科に入学したが昭和2年6月退学、9月より再び大久保小で代用教員をし、12月検定で訓導となる。3年9月浦ノ名小に転任、4年4月祝吉小に転任、6年4月梅北小に転任した。祝吉小時代に津曲と知り合い、また同校代用教員の小山と親しくなった。彼は中学時代から文学を好み、昭和2年大久保小時代には同人7～8人と詩の月刊同人誌「青銅」を、5年頃祝吉校時代には文芸同人誌「班猫」を発行し、また地元新聞などに創作・評論などを投稿している。この班猫同人には小山や詩の批評などで知り合った宮崎高女卒の緒方千世（宮崎第三小訓導）やその友人数名がいた。彼はこの頃からプロレタリア文学運動に参加することを考えていたもようである。当時「第二貧乏物語」をはじめマルクス経済学やプレハーノフ「史的一元論」「階級社会の芸術」やマックス・アドラー「階級教育論」など社会主義関係の学習をかなりすすめており、「新興教育」も6年2月頃東京の友人から送られ読んでいた。こうして6年4月頃には経済闘争と階級教育の実践をする教員組合の組織が必要であると考えようになり、各地の知り合いの教員に働きかけはじめていた。たとえば6年4月頃、緒方に自分の思想的確信を述べた手紙を書き、6月頃には西諸県郡野尻公民学校の大野初行に農業恐慌についての切抜きを送って働きかけていた。

小山 光は、本籍・東諸県郡木脇村大字木脇、明治40年生、出生地は西臼杵郡高千穂町である。父は宮崎師範卒で小学校長・県視学・郡長などを勤めた後、朝鮮総督府に出向し学務課長等を勤めたが、光が4才のとき朝鮮で病死した。その後郷里に引揚げたが母が女手で一家を支えることになり経済的には苦しい生活で、宮崎中学に進学できたのは養子に行った三兄山下剛（高鍋中学教諭）の学資援助のおかげであった。中学卒業後宮崎県庁雇員になったが中学時代からの神経衰弱が嵩じて2年で辞職、1年間兄のもとで療養し、3年4月から祝吉小の代用教員になった。彼は幼少の頃から不遇であったので社会の矛盾を強く感じていたが当初はその救いを人道主義的な平等思想に求め、賀川豊彦やガンジーを崇拜していた。しかし藤村の「破戒」に差別の深刻さと社会的問題性に眼覚め、プロ文学で社会の階級性に眼を開くようになり、横山に社会主義思想を説かれ、その思想的変革をとげるのである。こうして当時はプロ文学の理論や「マルクス主義と教育問題」「教育戦線」など、社会主義文献の学習をすすめていた。

山元都星雄は、本籍・都城市八幡町、明治41年生で、その経歴・思想変革の経緯は前報で詳しく紹介したので省略する。山元もこの頃にはマルクス主義の立場に立って実践しなければならぬことをはっきりと決意していた<sup>7)</sup>。

このように横山・小山・山元はそれぞれにマルクス主義の学習を深め実践の道を模索していたから、津曲の呼びかけに直ちに賛同し組織結成にふみきったのであった。

7) たとえばこの決意をうかがわせる前報70～71ページの「嘆きの塑像」の執筆時期は昭和6年2月～4月である。

7月初旬、某日午後2時頃、都城市東町油屋通り5丁目の山元宅で四人の最初の顔合わせの会合が行なわれた。津曲は自分の社研の活動経験をまじえて組織活動の基本について説き、集団的な学習・研究のなかでこそ理論・思想の建設もできるし実践も発展すると研究会をつくることを提案した。そして共同のテキストに何を使うかの相談で、「プロレタリア科学」「新興教育」（以下「プロ科」「新教」と略す）「観念工場」などの名があがったがきまらず、次回に研究会の正式の結成会議をひらき活動の方針を議論するなかできめることになった。

この経緯からうかがわれるように、研究会の基本的性格や組織の発展方向はあいまいであった。当時各地で階級的教育労働者の運動が組織されているが大抵は新興教育研究所の運動に結集することを自覚して「新教」支局の組織化としてすすめられたり、全国的な教育労働者組合運動に結びつくことを展望しながらまず地方独自の教育労働者組合を建設するというように、はっきりとした運動論・組織論をもって行われていた。すでに当時はそれだけの運動・実践の蓄積があり、運動の組織者（オルグ）はその点で目的意識がはっきりしているのが普通であった。この点において津曲の目的意識性は不明確であったように思われる。津曲には共青組織の建設の意図があったとも云われるが、これも確かでないし、その後の運動の発展とも一致していない。テキストとして「プロ科」「新教」が話題にのぼったというが、これらはそれぞれ運動体の機関誌であるにもかかわらず、この新しく生まれた研究会がめざす運動の発展方向との関係で検討されている形跡はないのである。それらの雑誌は単なるマルクス主義的な理論・啓蒙雑誌としてとらえられているようである<sup>8)</sup>。「観念工場」を提案したのは津曲であったというが、それは教師中心の組織だから、教育関係の左翼的評論誌として出してみたのだという。しかし「観念工場」については「新教」6月号に「『観念工場』を粉碎せよ！——雑誌『新興教育』は教育労働者の唯一の階級的・大衆雑誌であらねばならぬ——」という批判論文がのり、関係者の除名問題さへ出ていたのである。この批判は今日からみて多少問題があるとはいえ、津曲がこれを知りながら提案したとは思えない。これらの流れから推察できるのは、津曲には階級的教育運動あるいは教育労働運動として発展させるという明確な目的意識はなく、社会主義的意識分子をとにかく結集することがこの時点での課題であり、それがどのような運動に発展するかは組織のメンバーにゆだねられていたのであろう。こうしてこの運動はその実践のつきかさねのなかで自力でその運動の展望をきりひらき発展していくことになるのである。

## 2. 研究会の結成と組織確立の活動

7月12日（日）昼から約3時間、都城市松元町旭通りの菓子屋二葉屋二階に津曲ら4名が集まり「日南新興教育研究会」（以下「会」と略す）の正式の結成会議を行なった。山元らはそれぞれの学

8) この点は、この組織が「プロ科」支局を設置したときもそうである。この運動のいわば「自生的」とでも云いような特徴、自分たちの実践のなかでその運動の方向を模索しながら成長・発展していったことも関係している。

校・職場の状況を報告、今日の教育制度の欠陥を指摘・批判し、それを階級的立場からいかにとりあげ、どう闘っていくべきか、その方向・方法について話しあった。津曲はマルクス主義の思想問題について述べ、理論と実践との関係について論じた。会の名称を定め、その活動について、月2回日曜か土曜の夜定例研究会を行なう、そこで学習を深めるとともに実践の方向を出す、同志の獲得に努めそのためメンバーがそれぞれ同僚との会合をもつ、その武器として機関誌を発行することなどをきめた。

横山らは文芸同人誌を発行した経験はあるが運動の組織者としての機関誌のイメージははっきりせず、どんな機関誌をつくるか議論された。津曲の助言もあり、各自の研究したことや時事問題の解説、詩、漫画、教員に関する事柄など、バリエーターに富んだものを考え、具体的には研究会でどんな記事をのせるか相談してきめることになった。機関誌の題号は教員の左翼化をめざし教育の階級的批判の意味をこめて「赤いチョーク」と名付けられた。機関誌のつくり方は、会で各自が分担する記事を決定し、それぞれが分担した項目を執筆しそれを一定部数各自で謄写印刷して持ちより、それを綴りあわせて一冊とするというしかたをきめた。テキストは「新教」にきまった。それを各自バラバラに購入するのは危険だということで山元が本社から一括購入することになったが、それは前述のように新興教育研究所と組織的に連絡することを必ずしも意味していない。しかし会名や機関誌の題号、テキストの選定、会議の議論内容にみられるように、会の運動を教員の階級的自覚化と組織的結集、教育闘争の展開という二本柱ですすめる方向はすでにあらわれていた。

**7月19日**（日）午後4時から約3時間、都城市牟田町の日之出食堂二階で会が開かれた。テキストの「新教」をまだ入手していなかったので山元が「ナップ」を持参し皆に回読し、次にもちよった機関誌の原稿を批判検討しあった。横山が「創刊の辞」を書いたが、その結論部分を津曲が補強し、教員がマルクス主義の立場に立つべきことのアピールをより明確にした。また各自の学校内の出来事が報告されそれに対応するかが議論され、同僚の意識傾向や同志獲得の見通しなどが話しあわれた。この日は会の組織体制も討議され、この研究会を中央研究会とし、メンバーの各学校毎に班を置きそこで班研究会を組織するという方向をきめ、班の責任者は同志の獲得に努め班の確立を当面の課題とすることになった。班と責任者は次の通りである。（ ）内はペンネーム A—大王校班—山元（島野雄二） B—梅北校班—横山（堂園） C—祝吉校班—小山（岸本広二）

最後に会の規約・テーゼの作成が問題になったが、これは次回までに成案を準備することとし、次回の中央研究会を夏休みあけに行うこと、休み中に同志の獲得に努めること、休み中の文書連絡は危険だから行なわないなどをきめて散会した。津曲はこの会のあと再び上京した。

「赤いチョーク」第1号は7月下旬に発行された。部数は10数部ほどでメンバーが各自2～3部と津曲<sup>9)</sup>に1部送った。各自これを信頼できる同僚教師に読ませ研究会への参加をよびかけること

9) 津曲は7月中旬に再び上京し、その後の連絡は主として山下満彦があたった。山下との連絡は小山がとっていた。

にした。この配布は夏休みに入る直前か直後に、市内西上町前田洋行前の東京軒食堂の二階に集まり各人に手渡された<sup>10)</sup>。第1号の内容の概要は次の通りで執筆者名がペンネームの場合には( )に本名を記しそのあとに内容の簡単な紹介をする。

「**創刊の辞**」藤本勝(横山)一現社会制度の欠陥を暴露し教育者が冷遇されている状況を指摘、その原因を説きながら教育者の解放をかちとるためにはマルクス主義の立場からの研究と批判・実践が必要でありまたそれ以外には根本的解決の道はありえないことを論じた。

「**尋常四年教材批判『胃とからだ』<sup>11)</sup>**」楠本正勇(小山)一胃(資本家)と手足(労働者)の対立を「世は相持ちだ」(労資協調)に解消するこの教材のねらいを暴露し、胃とからだは完全な有機体で利害は完全に一致する、しかし資本家と労働者は利害の根本的に対立する階級であり、この引例そのものに非科学的なサギが含まれていると鋭く指摘し、教師の科学的な教材批判の目と実践をよびかける。

「**夏休みの講習会をボイコットせよ**」(筆者不明)

「**童話 先生の話**」哲朗(山元)一戦争にかりだされた子をもつ母の悲しみを描く。

「**童話 白髪染め<sup>12)</sup>**」哲郎(山元)一老労働者が老齢であることがわかると資本家に無慈悲に解雇されるので、白髪を染めて年齢をかくして労働するという、労働者の悲惨な生活を描く。

この機関誌第1号の内容が教育闘争の具体的な実践指針で構成されていることは注目に値する。それは当時の「新教」の内容構成からみても先進的であるといえるものである<sup>13)</sup>。第一に、反戦平和という当時の基本的課題を教育実践において具体的にどう展開するかに実践的にこたえようとしていること、第二は教育実践における闘いを単なるイデオロギー批判に終らせず、その教材を構成する論理にまでふみこみ、それを教師自身が科学的に把握することを通して、科学的な認識をこどもに形成するという方向を含んでいたことである。小山や山元の論文・創作にふくまれているこのような観点はその後の実践でいよいよ明確になる。

夏休み中、山元・小山・横山はそれぞれ同志獲得に積極的に活動し、山元は河野国夫・阿万超二・種子田福盛を、小山は永井登美・野口マツエ・山下満彦を組織し、横山は小寺信利・野村キミ

10) 7月19日の会議場所が東京軒だという供述もあるが前後の関係から別の集まりであろうと本文のように推定した。

11) 「胃とからだ」の教材批判はこれ以前にもある。たとえば「教育新潮」昭和3年2月号に「王無久」(田辺清春)署名のものがある。これとは批判のしかたがちがうので小山自身の独自の批判であろう。

12) 同題の童話が、新興童話作家聯盟の「童話運動」昭和4年2月号に土方定一によって発表されている。山元がこれを参考にしたかどうか不明であるが、そもそもの素材は当時の教科書に出てくる齊藤実盛の話からとられているようである。土方のものと山元のものとは山元の原文が不明なので比較しにくい。土方の方は「白髪染」(染料)が語る擬人的な形式であり、山元の方はそれを使わざるを得ない老労働者の生活を主題にしている点がちがう。

13) 「新教」がこのような教育闘争の具体的実践例や教材批判などをとりあげるのは昭和6年12月号からであるがそれはこの宮崎の「赤いチョーク」の実践報告の紹介を含むものである。

エ・浅草チハルなどに積極的に働きかけた。

河野国夫は、本籍・東臼杵郡北浦村大字宮之浦、明治44年生、旧姓は佐藤で生家は延岡町本小路にあるが20才のとき河野家の養子となった。養家は「相当の資産をもっている」といわれている。延岡中学校卒業後宮崎師範二部に入学、5年4月大王小に赴任した。大王校での山元との交友関係は前報に記したので略す。山元の影響でプロ文学や「第二貧乏物語」などのマルクス主義文献も学習、「ナップ」なども購読していた。6年4月から8月末まで短期現役で入営していたため「会」の結成には参加しなかったが、外出のとき山元宅に遊んだりしており事情は知っていた模様で除隊、復職と同時に「会」に参加した。

阿万超二は、本籍・児湯郡上穂北村大字南方、明治45年生、実家は資産というほどのものをもっていない。上穂北小から宮崎第一小を経て宮崎中学を卒業し宮崎師範二部に入学、5年4月北諸県郡安久小に赴任した。中学時代に数回ストライキを行ない、校長排斥ストでは一週間の停学になるというなかなか活潑で批判心のある文学青年であった。5年暮頃から「第二貧乏物語」などでマルクス主義に関心もちブハーリンの史的唯物論なども学習しており、また「新教」創刊号も都城市の田中書店で購入し読んでいた。阿万は河野と師範の同窓で親しく、プロ文学や社会主義思想の勉強のなかで河野から山元を紹介され、6年1月頃から河野とともに山元を訪ね、プロ文学や現社会批判などを論じることも度々であった。そのような関係から山元は7月中旬に安久小に阿万をたづね「ナップ」をすすめ、「会」への入会を承諾させた。その1～2週間後、山元からの連絡で横山も阿万を訪ねている。「赤いチョーク」1号は発行と同時に阿万に送られている。なお阿万はこの時、自分から「新教」を本社に申込んだ模様で、7月25日には7月号が本社から直送され、読者番号「H32」という連絡をうけているという。

山元が阿万を訪ねたとき、安久小の同僚で阿万の友人である種子田福盛も同席し、山元の話に共鳴した。種子田も阿万と共に社会主義思想の研究をすることに賛成し入会した。

種子田福盛は、本籍・北諸県郡高城村大字大井手、明治41年生、家に資産はない。小学校高等科卒業後、郡教育会の教員養成所を卒業し、大正13年4月山ノ口小に勤めた。昭和3年4月山田小に転じ、4年10月から5年3月まで宮崎師範講習科に学び、再び山田小に復職、5年10月より安久小に勤めた。彼は家庭的に不遇で教員になってからも師範卒でないため冷遇され<sup>14)</sup>、社会の不平等・

14) 当時の小学校教員は師範学校本科一部卒が正系とされた。それは高等小学校二年修了で入学し原則として5年間の全寮制教育を行なうことによって天皇制教育の忠実な担い手としての教師を育てたからである。大正末に中学校・高等女学校卒業を入学資格とする本科二部（修業年限1年または2年）が設けられ、一部と二部は給与上では差がなかったが、さまざまな面で一部卒が教育界の中核とされた。従ってこれ以外から小学教員になったものは傍系とされ、給与や将来の処遇などでいちじるしい差別をうけた。その一例として都城地方での昭和6年5月現在の給与を学歴・年令との対比で示してみよう。

	年令	給与	学歴
横山 巖	27	38円	大13中学卒、大学中退昭2検定
師範卒（男）	27	58	大14師範1部卒
種子田福盛	24	38	大13養成所卒、昭4師範講習科
谷口忠夫	25	33	大14養成所卒、検定



矛盾を痛感し、3年頃から「戦旗」「文芸戦線」などプロ文学を通してマルクス主義に接近していた。山元とは教員養成所で同窓であったという<sup>15)</sup>。

永井登美の経歴については不明である。当時21~2才で祝吉小の教員で、この運動に参加した女教師のなかでは一番活動的で積極的に組織拡大に努力した。彼女の姉永井イトも大王小の代用教員であり、姉にも働きかけている。

野口マツエは、本籍・北諸県郡沖水村大字郡元、当時25才。祝吉小・都城高等女学校を卒業後、郡立教員養成所に入り、大正15年4月祝吉小に赴任。非常に真面目で同僚で一人として野口を悪く云う者はいないという信頼の厚い教師であった。

永井も野口も6年のはじめ頃から、社会主義的な考え方に触れていた模様で「女人芸術」<sup>16)</sup>などを購読している。5月頃、祝吉校の国語研究会で師範附属の吉田訓導の講演に刺戟され社会科学の研究をするようになったという<sup>17)</sup>。この頃、永井と野口は社会の矛盾について話しあい、小山から「第二貧乏物語」やマルクス主義文献の解説を聞いたり、社会制度の欠陥を説かれたりして、急速に新しい物のみかたをつかみとって行くのである。「赤いチョーク」や小山の話聞いた野口は、今まで自分が教えられてきたことと正反対の話を聞き、その新しい見方でみた世界こそが真実であるという新鮮な驚きと眼の前がさっとひらけて本当のものが見えだした喜びを感じたという。今まで貧しい児童が手芸品や学用品も持たず十分な勉強もできないで困っている姿をみて、時々自分のお金でなにほどかの補ないをしてきたが、到底意の如くできず悩んできた。経済不況でそのような貧困児童がますますふえている、農村の非常な困窮、そして教員や役場吏員の俸給不払い、これら一連の問題を新しい眼でみ、考えるようになった。そのなかで彼女は、富の平等が必要であり今日の社会制度に根本問題があり、それを改めなければならないと考えるようになり、小山や永井らと勉強していくことがその解決の道をつかみ自分の悩みを根本的に解決することになると考えるのであった。

### 3. 闘争課題の明確化と実践の展開

9月上旬（6日（日）か？）午後、市外の母智丘神社境内で休みあけの最初の研究会が行なわれた。山元、横山それに新しく河野、阿万が参加した。山元から新しい同志の紹介があり、前に注文

	年令	給与	学 歴
小 山 光	25	33	大15中学卒、代用教員
師 範 卒(男)	25	53	大15師範1部卒
師 範 卒(男)	20	43	昭6, 師範1部卒
永 井 登 美	20	30	高女卒
師 範 卒(女)	20	36	昭6, 師範1部卒

- 15) 養成所は期間6カ月で、調書では種子田は大正13年3月修了、山元は大正15年3月修了と2年ずれがある。
- 16) この雑誌は昭和3年7月、長谷川時雨が自由主義的立場から広く新・旧女流作家と団結する方針でつくった。やがてマルクス主義的な傾向が強まり、婦人解放運動のための婦人の特殊な言論機関として職場通信や相互通信が盛んとなり、しだいに婦人大衆自身のものになりつつあったが、弾圧の前に昭和7年5月廃刊した。（平凡社「世界大百科事典」における熊坂敦子氏の解説による）
- 17) これが真実かどうか疑問、祝吉校関係者の聴取書では社会科学へ関心をもつに至った契機として共通して出てくるので、口うらをあわせたとも推測される。

していた「マルクス主義労働者教程・経済学」が皆に配られた。これは研究分担がきまっていないので、この日は夏休み中の活動報告、機関誌2号の内容の相談、そして前回からの懸案の規約・テーゼの審議が行なわれた。

規約・テーゼの原案は山元がつくり、若干の字句修正で採択された。いずれもきわめて簡単なもので大凡そ次のようなものである。

**規約** 1. 研究会は日南新興教育研究会と称す 2. 新興教育の理論を研究することを我々の主張とす 3. 個人的研究は良く其研究を成し遂げ得ない故に相互研究を必要とす 4. 男性の研究会に止めず女人の参加を拒否せざる事<sup>18)</sup> 5. 各班に責任者を置き各班の責任者を以て委員会を構成す 委員会の権限 (1) ニュース発行の件 (2) 本の購入の件<sup>19)</sup> (3) メンバー新加入者承認の件 等の権限をもつ。

**テーゼ** 1. 新興教育理論はマルクス経済学より出発するが故に其の研究を為す事 2. メンバーの拡大に努むる事 3. 本会のメンバーは絶対に秘密を厳守して此の規約を口外せざる事

この規約・テーゼがどのような議論のうえにつくられたかわからないが、当時のこの種の組織の採用していた規約・運動方針が理論的でいかめしく整備されているのとは対照的で全く異質の感がある。それは恐らくとくに既成のモデルを参考にすることをしてしないで、自分たちの運動の実体に即してそれに実践的に必要な限りで文章化したからではないかと思われる。その点から云うとこの運動のきわめて実際的な自主的な活動スタイルを反映しているといえよう。またこのテーゼには「研究会の運営は委員合議制による」という項があったとも云われ、規約にも「『新興教育』の読者で日南新興教育研究会を組織し毎月2回以上集合して研究会を行う。研究会では『新興教育』をテキストとし、プロレタリア教育理論を認識し、今日のブルジョア教育の改革に資することを目的とす」という規定があったとも云われるが、文章としてそのような表現があったかは確かめられない。しかし運動の実態としてはそのように運営され、その目的もそのように意識されていたことは確かである。その明文の規定はともかく、ここにこの運動の目的・組織・運営の基本は明確になったのである。

「赤いチョーク」第2号は9月中旬に発行された。この号は原稿が山元に集約され、主に河野と阿万が二人で原紙を切り謄写し、15部位つくったという。その内容は次の通り。

「日南新興教育研究会 規約・テーゼ」

「崩壊に瀕せるブルジョア教育」(横山)

「尋常科国語読本教材批判」(山元)―これは小学1年から6年までの国語教材で丁度2学期に使

18) 原案は男教師・女教師であつたらしい。それをこのように修正したのは、研究会会員を教師に限定したいという考え方があつたのかも知れない。

19) この運動では雑誌や書籍を皆が一定額を抛出して購入し、それを回読するという形で研究グループをつくる活動がよく行なわれている。それは経済的な負担の軽減という以上に組織化の重要な方法であつた。この本の購入はそのための回読用のもので何を選定するかは重要なポイントになるのである。

用するものを選んで批判したもののである。第3号にも同題名の山元論文があるので2号に全部のったわけではないと思われる。前報に記したようにその内容（全部かどうかは不明だが）は文部省学生部「プロレタリア教育の教材」などに収録されている。

「軍隊生活に関する感想」（河野）—短期現役で入営中の経験を書いた反軍的なものらしい。

「吾々は斯く闘はねばならぬ」（小山）—教育闘争について論じたものである。

「詩」（山元）

この第2号で会の教育闘争へのとりくみが意識的に展開され重視されていることがうかがえる。山元の批判論文は第3号にのったものをあわせると、文部省資料に要約的に採録されているものだけでみても巻二から6教材、巻四から5教材、巻六から4教材、巻八から1教材で計16教材（この中には小山のものも若干含まれていると思われる）で字数にして5千数百字に及ぶ大部のものである。その内容紹介と検討は別の機会に一括して行う予定であるが概括的に云えば教師自身が教材をどうとらえるかに力点があるようである。山元らの教材批判は、まずその教材のイデオロギー性をえぐり出しその階級的な意図をはっきりと摘出している。次いでその教材が取扱っている事物・主題の科学的究明をしその真実の内容を示すのである。それはあくまでも教師にたいしてその教材をどうつかむべきかという問題を出し、その具体的な分析を示すのであって、その教材をどう教えるかということが主眼ではない。教師がもつべき教材の批判的認識の内容と実践において展開されるであろう教材の批判的再構成の内容との区別がどこまで自覚的に意識されていたかはわからないし、いくつかの教材批判ではイデオロギー批判の内容をそのまま実践化しようという性急さもみられるが、全体としては科学的な批判を貫ぬいていた。

9月下旬（土）夜、山元宅で「プロ科」の研究会が行なわれた。出席者は山元・横山・小山・河野・山下満彦の5名である。ここで小山がソヴェトをめぐる各国の戦備について西部国境ではチェコスロバキヤやポーランドのような小国が英仏の投資で軍備を完備し、東洋において日本が対ソ戦の軍備を強化している状況を分析し、対ソ戦争の危険が迫っていることを報告した。この研究会にはじめて参加した山下は現職教員ではないが小山の紹介で出席した。山下がこの研究会に参加した事情は明らかでないが、この研究会は通常の「新教」の研究会ではなく「プロ科」をテキストとして基礎的な理論学習や政治経済的な情勢分析などを主とする別個の研究会であったように思われる。もっともそのような組織上の区別はきわめて観念的であってメンバーの実質的な区別は山下だけで、実際にどれほど使いわけられていたかは不明である。

山下満彦は、本籍・北諸県郡沖水村大字川東、明治42年生。生家は田地・畑それぞれ一町歩ほどの農家である。都城中学卒業後、高等工業学校受験準備で上京したが失敗し、昭和3年4月から祝吉小代用教員になった。9月に山之口小に転じ5年8月代用教員整理により退職させられた。その後農業を手伝うかたわら耕地整理組合の測量師として日雇で働いている。彼は中学時代から文学を

好み、やがてプロ文学に関心をよせた。また中学時代からの友人津曲武治、小山光の思想的影響や代用教員時代の経験とりわけ辞職を強要された事情などから、現在の社会制度ではプロレタリア階級の者の幸福は望みえないと考えるようになり、社会主義の研究にうちこむようになった。当時、マルクス全集、佐野学の日本歴史研究、日本農民運動史、婦人論、レーニンの帝国主義論などを学習していたという。津曲が6年6月帰郷したとき、津曲から「無青」の配布や読者獲得などを頼まれ、都城地方の「無青」組織者の役割を果たすことになった。こうして津曲が東京に戻ってからも津曲と連絡しあい、「赤いチョーク」も山下から送られていた。山下は代用教員時代から小山と親しく、また「会」結成時にはすでに山元と知りあっていたが、おそらく現職教員ではないということと、山下が津曲との関係で「無青」の仕事をもち農村青年の組織化を基本任務とするという点から「会」と直接に関係しないようにしたのではないかと推測される。山下は「会」と津曲との連絡役をすると同時に、津曲から送られてくる「無青」「レーニン青年」「第二無産者新聞」「労働新聞」などの非合法紙誌を山元や小山に配布する役割を果たしている。この山下が「会」に出席する事情は先に記したように不明であるが、「プロ科」のメンバーという資格であったようである。

**10月上旬**（日）昼から夕方まで山元宅で「新教」の研究会が行なわれた。出席者は山元・横山・小山・河野・山下・阿万（阿万の出席には疑問もある）であった。「新教」を輪読しながら質問や意見を出しあった。次いで各自が学校の状況報告や同志拡大活動の報告が行なわれた。小山から機関誌2号にのせた教育闘争についての論文を中心にして、児童に対する階級教育の問題が提起され、児童の文化（カルト）問題が討議された。これは児童にたいする働きかけの観点や方法、児童に獲得させるべき文化内容はどういうものかという問題であったようである。これは11月の研究会でも引き続き討議されているが、先に述べたように教材の批判的認識を具体的な教室での実践においてどのように再構成し展開したらよいかという問題であるように思われる。そのような実践課題がはっきりと自覚されるに至ったところに、彼らの実践的なとりくみの進展がうかがえよう。

なおこの頃から、この中央研究会に出席する者を中央委員とし、その会合を中央委員会としたというが、それがどの程度組織的に討議され、中央委員の選出やその役割がどうきめられたかは不明である。ただこの頃には大王校班も祝吉校班も班メンバーが複数になり、独自に班研究会が開かれるようになっていたから、そのような状況にあわせた一定の組織整備があったのだろうと推測される。

**10月18日**（日）正午、山元・横山・河野・阿万の四人が練兵場に集合、郊外の母智丘山へピクニックすることになった。それは機関誌第3号の原稿のもちよりをかねて、秋晴れのもとで英気を養おうという計画である。途中の道々、3号に予定しているロシア革命についての論文のなかみを山元と横山が議論していた。そのうち横山がメーデー歌などを皆に教えながら歌った。母智丘神社では横山、山元がピョテルの「小さい同志」などを声朗らかに歌った。横山は今日のために学校で放課後オルガンで練習していたのであった。ひとしきり歌が終ると、山元が第3号の原稿である創作童話や童謡を、阿万も創作詩を朗読し、皆の批評を求めた。

**10月下旬**（日）夜4時間、山元宅に山元・横山・小山・河野が集まり中央委員会を行なった。

「新教」をテキストに研究したが、どうも内容が物足りないという意見が多く、今後は「新教」は各班研究会のテキストにし、中央委員会では「プロ科」で学習しようということになった。「プロ科」は山元が購読していたのでそれを皆で検討した結果のようである。そこで「プロ科」の共同購読をするなら支局を正式に設置した方が誌代の割引きもあり中央からの指導もあるということで、支局設置をきめ、山元が支局責任者となって中央との連絡にあたることになった<sup>20)</sup>。この会合では津曲から山下宛に送られてきた「レーニン青年」(美濃紙約40枚の謄写刷のもの)を小山が皆に回読させ、山元も「無青」の「ロシア革命記念闘争準備号」を回覧した。このような共青、全協関係の紙誌や「第二無新」などは大体、津曲から山下、そして小山か山元というルートで研究会のとき回読されていた。

「赤いチョーク」第3号は10月下旬に発行された。この号は次のようにきわめて豊富な内容であった。

「ロシア革命史」島野雄二(山元)―これは11月の革命記念日を前にしてロシア革命の歴史的意義を説いたものである。

「プロレタリア教育の出発点」南崎徹(横山)―これまでの教育闘争についての論議に理論的に迫ろうとしたものらしい。

「反戦問題に就て―満州問題の再吟味」(小山)―満州事変の背景を分析しつつ反戦の課題を提起した。

「国語読本の研究」(山元)―前号から引続く教材批判であろう。

「宗教講座」河野生―原始宗教から近代宗教までの史的展開を検討した宗教批判論。

「創作」哲郎(山元)―「新教」の研究会に結集した5～6人の教師たちが学校で起っている問題をとりあげ、論議・批判するという学校での闘いの展開を小説風に書いた。

「童謡」哲郎(山元)

「詩」まつおか(阿万)―子どもの生活における貧富の差別問題をテーマに、貧乏人の子どもが運動会で汚ないシャツで競技している様子をキレイな服を着たブルジョアの子どもが嘲笑する情景を批判してうたったもの。

その他に、青木静代(山元)冷明(河野)署名のものがあるようだが内容不明。

11月上旬(日)午後6時から4時間、山元宅に山元・横山・小山・河野・阿万が集まり中央委員会を開き、「新教」を中心に研究しながら従来から論議が続けられてきた児童にたいする階級教育の考え方、その方法などが討議された。それは各人がつねに問題とし悩んでいたことであるとともに、「新教」も児童に対する働きかけを実践的課題として強調していたのである。この会であらた

20) 支局設置は9月で支局番号は「九州ほの6号」だという供述もあるが、本部からのレポが来るのは11月下旬からであるので、11月承認、支局番号「九州第8号」が正しいようである。

めて同志の獲得・組織の強化とともに教育闘争の実践の重要性が確認され、それをすすめる武器として「新教」の研究と普及が問題になったようである。この日「会」の活動を全国的な新興教育研究所の運動に組織的に結びつけ、その地方組織として中央の指導のもとに活動する必要が論議され、「会」を「新教」支局として性格を明確にすることになった。支局の組織・機構（アジ・プロ部、財政部、出版部など）と責任者についても検討されたが、支局がもう少し拡大強化された段階で考えようということで山元を責任者とすることだけをきめた。支局設置は、全国各地のこれまでの状況からみて警察の弾圧の危険を予想しないわけにはいかなかった。当時すでに共産党—教労—新教という線で当局は弾圧をしてきているので、地域の独自の運動から「新教」という全国的な運動の一環に組織的に結びつくことは、弾圧をうける可能性を考えないではできないことであった。弾圧対策がいろいろ協議され、小山から支局の組織的な動きをカムフラージするため普通文芸の文集を発行する同人組織という形をとったらどうかという提案をした。山元は反対であったが、他が賛成したので文集発行が決定された。（しかし実際には実行できなかった）またこの会議で組織の拡大にともなう班の再編成がきまった。A—安久校班—阿万 B—梅北校班—横山 C—祝吉校班—小山 D—大王校班—山元 である。支局設置についての本部の承認は昭和7年1月中旬で支局番号は「Hほ」であったという。

「赤いチョーク」第4号は11月中旬に発行された。この号も1冊30数枚の大部のものようである。その内容は次の通りである。

「軍国主義の鼓吹と戦ふ」松田（河野）

「ロシア革命記念日を我等はかく闘ったぞ」岸本浩二（小山）

「ソヴェートロシア革命記念日座談会」（河野）

「教材研究 小学国語読本の研究」島野雄二（山元）—これは「新教」6年12月号に「国語読本の取扱い方について」として掲載された、巻六「俵の山」の実践記録である。まず教材の素材である農村・農業について生産関係・経営実体を科学的に分析し、次に教材の主眼を児童に対して現代農村の現実を児童の程度に於て具体的に知らせることに置いて、授業の準備をする。第一に学級の階級的分析でこの教材の授業で中心となって活躍させるべき児童を選び出す。それはこの授業展開の構想と結びついたものである。第二に全児童にこの学習のための「調査」を課し、とくに先に選んだ児童に対しては親の協力を求めながら農家の具体的な実態を浮彫りにするような「調査」をさせる。このような周到な準備のうえで当日は児童に調査報告をさせながら、問答的に児童自身が農村の実態を知り、地主小作関係の矛盾に目を開き、小作料軽減闘争の必要を覚るような授業展開が示される。

「国庫負担額陳情と闘へ」岸本（小山）

「同志に提案する」D班豊田（山元）

「創作 連隊のある街」静江（山元）—教師が欠食児童の問題を追求していくなかでその子の父親

が労働争議に参加している事情を知り、やがてその争議を応援するようになり教師自身も研究会を組織して階級闘争の戦線に加わっていく過程を画く。

「創作 蛸」築木（小山）

「地震と宗教」哲朗（山元）

「短歌」S子（野口）—11月の營養週間の行事のなかで児童の欠食問題を考え、農村の納税講話を聞きながら衣食にも事欠く農民に何をおいても納税せよと説くこの社会の不合理・不公正を感じて歌ったもの。

「財部大将について」松太（河野）—郷土の「偉人」についての批判であろう。

11月某日、種子田が阿万の代理で出席した会議がある。出席者は山元・横山・種子田・その他二名で「新教」をテキストとする研究会であった。

この頃、山元は創作童話「殿様と三太郎」を校長の承認のもとに千数百部印刷し、大王小の四年生以上の児童に配布している。

11月下旬（日）午前11時頃から午後3時頃まで西墓地に、山元・横山・小山・河野が集まり「新教」の研究会をした。そのなかで同志の獲得が不十分であることが話題となり、自己批判がおこなわれた。

11月某日、支局委員会が開かれた。これが上記の諸会合と重なるものかどうか不明であるが、会議の内容からみれば別個のものである。それは「新教」6年12月号に「通信員便り 吾が支局の活動はこれからだ!」という記事にみられるものである。その内容は前報で紹介してあるので省略するが、その中で、当時の各班の活動の様子が次のように記されている。「四ヶ所郡、市班では、各学校、部教員会（部会）の青年教員による文学サークル、読書サークル、運動サークル等を巧みに組織して、支局メンバーの拡大に努力する……特に郡班に於ける自由主義的読書サークルによる有益な経験が語られた。一ヶ月に五拾銭宛出して、改造、中央公論、女人芸術等のブルジョア雑誌や、プロレタリア文芸作品を読み、漸次サークルの仲間を意識的に啓蒙する方法で、すでにその班では二三名の支局メンバーの候補が成長しつつある。」これは祝吉校班の活動の紹介のようである。

#### 4. 運動の新たな展開をめざして

実質的には3人の小さな研究会として出発したこの都城の教育運動もいまは「新教」支局として全国の闘いの組織的な一翼となり、そのメンバーも影響下の教員を含めると10数名になっていた。それは着実な発展であったが情勢の急迫が要求する課題にこたえるには余りにも弱体であった。この時期には満州事変以降の情勢の急角度の展開、フェシズムの危険に対してそれにふさわしい運動の大胆な方針転換がすすめられていた。文化運動の分野では10月21日、決定的闘争を前にして労働者階級の多数をその影響下に獲得するという方針のもとに「 Copp 」が結成された。「会」もこの全国的な動向と無関係ではありえなかった。

この時期のもう一つの問題は、都城の運動にも弾圧の危険が現実のものとなりはじめたことである。

**11月5日頃**、山元が姉の田中静子をアドレスとして受取っていた「プロ科」が郵便局で摘発・差押えられるという事件がおきた。それは共産党公判傍聴記を特集した「プロ科」臨時増刊号3冊で11月13日発禁処分<sup>21)</sup>を受けたものであった。この件にかかわって郵便局員たちが受取人である田中静子がかつて同郵便局に勤めていた当時のことを悪しざまに云う声に、かえって同情した局員の中馬敏子が、田中に連絡し、山元に伝わった。これによる直接の弾圧はなかったが少なくとも「プロ科」→田中→山元という関係は当局につかまれたわけで、それは「プロ科」支局→「新教」支局(実質的には同じメンバーである)への弾圧を予想しないわけにはいかない状況であった。実際、当局の文書によれば、この運動への弾圧のいとぐちは「『プロレタリア科学』直接読者の調査より判明」したとされている。

**11月31日**、東京から「アニワルシバンジタノムハヤ」という電報が山下宛にきた。後になって津曲から、それは自分が打電したものではないが共青中央の地方部が弾圧されたことの連絡だろうということであった。(11月30日、共青中央が弾圧され、全国の同盟地区、アドなどを記した文書が押収されたという)その後10日程して、セピア色の洋封筒で封のところに「電車の中で見た女をまた思いだした」というような俳句が書いてあり、内に「被害はなかったか至急知らせ」という数行の連絡文がはいっているものが来た。津曲はこれについて中央からこのようなレポを出す筈がないから警視庁辺りのさぐりかも知れないと云った。このときも直接に弾圧が及んできたわけではないし、共青(津曲)→山下という関係で「会」自体の運動とは直接的な結びつきはなかったが、さまざまな関連のなかで「会」への弾圧の危険を感じさせる状況が生まれていたのである。

**12月上旬(土)夜**、山元宅に山元・小山・河野・阿万が集まり「新教」「プロ科」をつかって研究した。とくに「プロ科」の「プロレタリア科学者同盟」の記事について、多数者獲得の方針にもとづく「同盟化」という組織方針が論議された。

**12月10日頃**、山元宅で山元、河野、阿万が集まっているところへ、丁度帰郷していた津曲が偶然に訪ねてきた。津曲は山元からその後の運動の進展状況を聞いて、その活動が不活潑であると批判した。山元は都城地方の封建的な思想状況のなかで会員拡大が思うにまかせないことや、地域の状況から研究会を開くことも仲々困難があることなどを説明したが、津曲は納得しなかった。恐らく津曲は東京での情勢の急展開や運動の全体的な再編の動きにみられる緊迫した客観情勢と都城という地方の運動の遅々とした歩みのギャップにあせりのようなものを感じたのであろう。

しかしすでに述べてきたように会の運動は着実に進展していたし、また組織拡大についても常々問題にされ、さまざまな実践が試みられていたのである。たとえば11月の支局委員会で出たサーク

21) 発禁処分の日がこの事件より後になっているのは、当時はしばしば法的に発禁処分を決定する前に弾圧が先行したからであろう。



ル組織の方針を具体化するため、12月上旬にD班でも検討が続けられていた。山元と河野は、今までのように周囲の友人だけを対象にしていたのでは同志の獲得は狭い枠から出ることにはできない、文学サークルのようなものを公然と組織してフラクション活動をしなくては駄目だと話しあい、22～23日頃、河野は師範のときの同窓である庄内小訓導の川崎栄一、猪崎巽を訪ね、文学サークルをつくる相談をし賛成を得ている。

**12月中旬**（日）午後6時より約4時間、山元宅で「新教」の研究会がおこなわれた。出席者は山元、横山、小山、河野、それに谷口忠夫、宮崎百太郎（宮崎の出席には疑問もある）である。谷口は田中、宮崎は大道というペンネームで山元が紹介した。

**谷口忠夫**は、本籍・都城市西町三丁目、明治40年生、出生地は鹿児島県の西桜島村で、三才のとき叔母の養子となり都城に來た。都城小高等科から都城商業学校に進んだが4年で中退し、都城教員養成所を出て、大正14年10月から庄内小の代用教員になった。昭和3年10月検定合格、4年4月夏尾小の訓導となる。彼は10才のとき叔母が亡くなったので、その後は都城に移っていた実家に戻ったが父も早く亡くなり生活は苦しかった。妹は郡是製糸の女工をしていた。山元がどのような関係で谷口を知るようになったかはわからないが、11月中旬頃山元が谷口に手紙を書き面会を求め、西都城駅で待ち合わせ、駅前通りのブラジル食堂で話し合ったのが最初である。そこで山元が農村の貧窮化や小学教員の減俸問題などについて話し合いながら、社会問題についての基本的な意見の一致を確かめあった。それから「ナップ」「新教」などを貸しこれらを一緒に勉強しようとさそった。谷口はそれらを読んで共鳴するところがあり、教育を「新興的な階級的な見方」にたって勉強する必要を痛感して入会したという。

**宮崎百太郎**は、本籍・福岡県三池郡三池町大字新町、当時26才、三池中学・広島高等師範学校卒で昭和6年4月都城高等女学校教諭に赴任した。担当科目は地理・歴史である。高師在学中社会科学研究会に参加し処分されたこともあるという。山元は都城の金海堂書店で宮崎が社会科学関係の書籍を購入していることを聞き、宮崎をたずねて運動への参加をよびかけた。宮崎は最初「プロ科」のメンバーとして参加した模様である。

この研究会の内容はほとんどわからない。「新教」の研究と、山元からD班の活動として山元、河野、宮崎が「プロ科」学習会を行なっていることの報告があったことぐらいである。

**12月下旬**（日）冬休みの直前（20日か？）午後1時から山元宅でこの年最後の研究会がおこなわれた。出席は山元・横山・小山・河野・阿万（途中、腹痛で退席）であった。定刻になっても皆が集らなかったので、山元が大いに憤慨してそのルーズさを批判し、それに対して横山は自分達の体はそんなに機械的にはゆかぬと反論したことから論争になった。山元はこのように時間を厳守しないようでは組織的な活動はうまくいかない、非公然の運動では規律を守ることがとくに重要だと主張した。さきにも触れたように客観状況はいよいよ厳しく、都城の運動にもいつ弾圧があるかわからぬ状況であったことが、この論争の背景にあるように思われる。この日は、「プロ科」のフェシズムについての講座を皆で輪読・研究したのち、以前からの問題である教室における階級教育の実

践について議論された。その中で、階級教育を単純に教室で児童に階級的なアジ・プロをするというように考えるのは正しくない。教壇の上から教師が児童にアジ・プロするのではなく、児童自身が社会を正しくみるような目を養うこと、児童自身で社会の真実を発見していくように訓練することが我々の基本的な立場である、ということが確認された。最後に山元から冬休み中の活動（調査活動らしい）が提案され、休み中の連絡を打合わせた。とくにレポについては十分な警戒が必要であると注意された。

この前後に津曲・山元、小山が運動の新たな展開方向について議論しているという。津曲が東京での運動について説明し、都城の運動の立ち遅れを批判し、運動方法について意見をのべた。この日は夜遅くまで議論し、小山は途中で帰ったが、津曲は泊まったという。その数日後の定例研究会（出席者、山元、横山、小山、河野、阿万、津曲）でもこの問題が再び議論された。その際、山元宛の本部からの「レポ」が、都城支局は活動が不活潑で会員の増加もみるべきものがなく、児童への働きかけもしていない、と批判していることが紹介されたという。本部レポが12月中にあったというのは支局承認の連絡が翌年1月中旬という点からみて疑問があり、またレポの内容にも疑問があるので、この会議の時期や内容は更に検討が必要である。細部の点はともかく、この時期に津曲を中心に運動の新たな展開方向について意見の交換が何回も行なわれている模様である。

**12月の休み**に入って、山元が津曲を訪ねている。津曲の家近くの稲荷神社でおちあい、一緒に早水神社に散歩しながらこれからの運動の計画を話しあった。津曲は東京の文化サークルの活動状況、その成果などを話し、都城市を中心とする文化サークルを結成し、それに現在のメンバーが入って活動するというのが良いのではないかと提案した。山元もその方向について基本的に賛成した。それはすでに支局委員会でも検討され、サークルづくりにとりくんでいるところであった。それでその具体的な計画を練ることになり、山元宅と一緒にゆき相談を続けた。津曲は同人雑誌を発行するという方法はどうかと提案したが、山元は都城地方には余り創作活動をする人は多くないから適当でないと反対し、やはり文学を中心とするサークルが関心もあるし幅広く活動できるということから、都城市を中心に文芸研究会をつくるという方向で考えようということになった。

**12月末（28～29日頃）**津曲、山元、宮崎の三人が鹿児島県の末吉町にピクニックにでかける計画があった。おそらく上記のように津曲から中央情勢を聞き運動のすすめ方を相談するとともに、この文芸研究会の構想を具体化するねらいがあったのであろう。しかし西都城駅での待ち合わせ時刻に山元が遅れたためピクニックはとりやめになり、山元が宮崎を訪ねて詫言、それから連れだつて姫城山に行き、そこでこれまでの相談の経緯、文芸研究会の計画などを話し同意を得た。文芸研究会結成の計画はこのようにして次第に具体化していった。

「赤いチョーク」第5号は12月下旬に発行された。その内容は次の通り。

「三Lデーを迎ふ」島野雄二（山元）

「血の日曜日」島野（山元）—これは上記の三Lデーの論文と同一のものかも知れない。ロシア革

命の発端となった事件を解説したもの。

「1931年の自己批判」(山元)—1931年を送るにあたってこの半年の会の活動を総括したもので、それまで個々バラバラであった我々教育労働者が、このように結集し組織をもち研究と実践のなかで成長するようになった画期的な記念すべき年であると意義づけ、しかし情勢は運動の一層の発展を求めており、会の活動にはまだ不十分が多いことなど今後の課題を論じた。

「文学サークルを作った話」岸本(小山)—これは「新教」7年1・2月号に「文化サークルを作るまで 九州 黒潮生」として転載された小山の祝吉校における実践記録である。(前報、C-3を参照)

「休職訓導に対する感想」赤樹(河野)

「題・不明」松岡(阿万)—安久小学校長が計画した開田事業にたいする教師たちみんなの不平不満を書いたもの。

「短歌」「童話」「経済恐慌についての解説」など

1月上旬(三学期の第一日曜)夜7時から山元宅で新年の第一回研究会が行なわれた。出席者は山元・横山・小山・河野・阿万・山下・津曲である。「プロ科」をテキストに討論したのち、横山が山元の執筆した「俵の山」の農業問題のとらえ方について批判し、山元と論争した。そのあと教育実践のとりくみに議論が移り、山元は「新教」の児童自治会の自主化についての論文をひきながら児童の指導について次のような問題提起をした。児童が自発的に自主的に行動するよう訓練することについて、児童が自ら要求し皆が団結して力をあわせれば大抵の要求は実現できることを経験させ、わからせなければならぬ。それには教師が児童の要求を大切にし頭からおさへつけないようにしなければならないことを具体例をあげて説いた。そして討議のすえ4年以上の各学年に自治会をつくる実践をすることになり、次回には自分も児童に自治会をつくらせる実践をして報告するつもりだと約束し、皆それぞれに研究、実践をもちようということになった。

1月上旬、某日午後8時から10時頃まで、山元宅で「プロ科」研究会が開かれ、山元・横山・小山・河野・阿万・谷口・宮崎・津曲が出席した。「プロ科」の三Lデーについての論文を読み質疑、討論した。「文化サークル」についても討論があり、その種類、役割などが問題となった。この日、山元から新教の中央のアドレスが検挙されたいという情報が報告され、それに対する十分な警戒・対策が必要だということで、今後なるべく山元宅で会議をしないようにしようということになった模様である。そしてこれまでの新教に知らせてあるアドを至急変更することになった。

1月10日(日)午後1時半より、山元・河野・谷口・宮崎の四人が一万城公園にピクニックに行った。これはD班の班研究会として計画されていたものに谷口をさそったものらしい。公園で、山元は「新教」12月号の「満蒙問題と教育労働者」を素材に反戦の教育闘争について問題提起をし、宮崎は同号の「郷土教育はどこへゆく」について論じ現在の教育のあり方を批判した。

1月上旬(12~13日頃か)山元宅に山元・横山・小山・山下が集まり、ここで山元がこれまで津曲と相談して練ってきた文学サークルの組織計画について提案した。全員がこれに賛成し、数日中

にあらためて西墓地に集まってその準備協議会を開くことになった。

「チョーク」第6号は1月下旬に発行された。この号から題号が変わったがその事情は後に述べる。機関誌の発行はこれが最後であった。その内容は次に示すが、第5号として記した「三Lデーの意義」や「血の日曜日」は第6号ではないかと思われる点もあるが、その点は確かめられない。

「工業都市N市」左傾教師（河野）—これは冬休み前の会議での申し合わせにより、河野が帰省中に調査した延岡町の日室工場の内容を書いたものである。

「宮崎市を探る」亜地丁太（阿万）—これも冬休みに行なった調査報告で、宮崎市内の書店についてプロ文芸など社会主義関係の書籍の読者の状況を調べようとしたものであるが、成功せず、結局各書店で扱っている左翼雑誌の紹介に終わったという。

「文学新聞をすすめる話」（河野）—旧友に「文新」購読をすすめて失敗した経験談。

「チョーク」第7号は3月上旬に発行する予定であったが原稿が全部そろわぬうちに弾圧にあい、遂に未発行のままにおわった。刷り上っていたものは次の通りであった。

「自主的自治会をつくる」（阿万）

「創作 出世した僕」（山元）

「詩 先生」（山元）

「3・15の歌」（プロ歌曲集より）

## 5. 文芸研究会の結成とその活動

1月中旬、午後2時に西墓地に山元・横山・小山・河野・津曲が集まった。まず津曲が都城の運動の不十分さを指摘し、中央、全国の労働争議、社会主義運動の展開状況・情勢を説明し、都城の運動を飛躍的に発展させる必要を説いた。そしてあらためて文学サークル組織の計画について説明され全体で討論した。文学サークルの性格や広汎な文学愛好者を結集する必要から中等学校の教員の協力が必要だということになり、どのようにして中等教員によびかけるかが問題となった。そこでサークル結成の実行委員を選出することになり、以上のような中等教員に働きかける必要やこの新しい組織をできるだけ広汎な合法的な大衆組織としてつくるためにこれまであまり表面だった活動をしていない人がよいということで、宮崎・河野・阿万・津曲<sup>22)</sup>の四人にきまった。この会に宮崎、阿万は欠席していたので河野、津曲が連絡して諒解をとることにした。このサークル結成の活動は当然公然たるものになりメンバーに対して社会的な注意もあつまると思われるし、昨年暮以来、弾圧の危険も感ぜられるので、会の機関誌の題号も平凡なものにしようということになり「赤

22) 津曲は都城ではあまり表立って活動していなかったのと、この組織化の計画の中心的指導者という意味があったのであろうが、後述する弾圧波及の危険と方針上の意見の対立からまもなく準備委員からはずれるようである。

い」をとって単に「チョーク」とすることになった。なおこの日の会では前回からの継続で児童自治会の組織化の議論もされている。

1月中旬(土)午後7時半から山元宅で「プロ科」の研究会が開かれた。出席者は山元・横山・河野・谷口・山下・宮崎・津曲である。河野、宮崎は所用があり30分ほどで退席した。山元から現在準備している文学サークル組織は Copp の方針にそって行なわれるのだが、Copp の成立や意義についてメンバーのなかにもまだ十分理解していない人もいたようだからと、津曲に Copp の説明を求めた。津曲は Copp 構成の各団体やその Copp への再組織・統一の経緯などを説明した。

1月中旬から下旬にかけて、河野、宮崎らのサークル結成実行委員は精力的に活動している。まずメンバー以外の準備委員を誰にたのむかが検討され、都城南小学校の肥田木淳訓導、都城中学の宇都研教諭があがった。1月23日頃河野が肥田木にあたりその趣旨を説明して了解を得、数日後宮崎と一緒にもう一度訪ねて、準備委員になってもらった。宮崎の方は宇都、西田季春<sup>23)</sup>、平井保彦らにあたり、宇都、平井が準備委員をひきうけてくれた。さらに集会の際に都城中学の妹尾校長や七高の新屋敷教授に講演を頼む手筈もきまった。

1月31日(日)宮崎方で準備会が開かれ、宮崎・河野・阿万・山元・宇都・平井・肥田木が集まった。会の名称や組織、方針、発会式の内容など協議し、会結成の趣意書を河野が起草することになった。この頃、会の名称を都城文芸研究会とすることがきまったようである。

2月7日(日)宮崎方で第2回目の準備委員会がひらかれた。出席者は、宮崎・河野・宇都・平井・肥田木・山元・小山であった。発会式の順序や役割分担・その後の研究会組織の手順などが相談され、また新聞社その他の宣伝もきめられた。

2月14日(日)午後1時から都城市早鈴町医師会堂で都城文芸研究会の発会式が行なわれた。都城中学の妹尾校長が「所感」と題し、新屋敷七高教授が「文学と人生」と題し講演し、都城中学西田季春教諭が「賀茂真淵の万葉六卷論」の研究発表をした。閉会の辞は肥田木が行なった。このあと都城文芸研究会の結成が行なわれ、研究会の組織・運営や役員などがきめられたようである。妹尾と新屋敷が会の顧問におされ、宮崎・宇都・西田・平井・肥田木・河野・菊地武望(都城南小訓導)らが都城市部会の幹事に、三原主計(祝吉小訓導)川崎栄一(庄内小訓導)種子田福盛(安久小訓導)らが地方部会の幹事になった。会の組織を地域別にわけて地域毎の小集会を開けるようにすることが山元らの主張できまった。こうして研究会は七部にわけられた。都城市部で約20名、祝吉校(第二部)で約10名、安久校で4名、庄内校周辺(第三部)で4名というように部会がつくれ、各部会毎に幹事がおかれた。女性会員は別に婦人部会をつくった。これも小山・永井登美・野口マツエなどが相談して永井が発会式のとき強く主張して幹事に認めさせたのである。婦人部会の会員で名前がわかっているのは11名である。会員は結成当初約40名といわれているが、これまで

23) 前報告では西田泰彦かも知れないと書いたが、季春で正しい。また出身は東大ではなく京大とのことである。大木二郎氏(鹿児島大学教授)の御教示による。

名前がわかっているのは中等学校教員4、小学校教員26、その他7である<sup>24</sup>。研究会は通常、各部会毎に月1回の研究集会（小会といった）を開いて研究をし、機関誌を発行することとした。機関誌の題号は「都城派」と名付けられた。運営は幹事のなかに編集部（部長・宇都、部員・河野）人事部（部長・宮崎）企画部（部員・山元）などをおいて行なうこととした。文芸研究会の結成は、「会」に新しい公然たる活動の場を保障するものであった。「会」のメンバー及び支持者たちは文芸研を大衆的に発展させるために活発に活動している。

**2月21日**、都城南小学校で研究会幹事会が開かれ次の研究会の計画がたてられた。集ったのは宮崎・河野・宇都・菊地・西田・肥田木、他に女性2名であった。**2月28日**、都城女子校で市部研究会が開かれた。参加者は宮崎・河野・山元・宇都・平井・西田・菊地・肥田木、他4～5名で、平井が「素材と表現」という研究発表をし、それをめぐって討論が行なわれた。そのあと宮崎、山元らが硬い研究発表だけでは幅の狭いものになるから文芸春秋や中央公論などの雑誌を回読しそれについて気軽に座談をする軟かい会合も組みあわせてはどうかと提案した。宇都は理論的研究を中心にすべきだと主張したが、議論のすえ山元らの意見が通り回読会も行うことになった。

**3月初旬**、婦人部の集会が大王小学校で開かれた。参加者は宮崎・宇都・永井登美・永井イト・河野リツ・釘崎久子・清水マサエ・安藤不二（いずれも市内小学校教員）と中山タツ子の9人であった。宇都は会の運営について会員の出席をきびしくいい、用意してきた「文芸学概論」のインストラクトの学習会を提案した。しかし、これは皆むつかしすぎるといい、永井の提案で自由研究と課題研究にわけて行うこと、自由研究は会員の興味・関心のある問題をなんでも自由に出せるようにすること、赤草、婦人公論、女人芸術、サロンなどの雑誌の回読会をもつことなどがきまった。これもこの婦人部小会の前に小山と永井・野口が相談していた方向であった。小山らは、この研究会でまずお互に親しくなること、その中で「文新」（文学新聞）や「新教」をすすめ読者を獲得すること、会の活動としては、合法的な雑誌の回読会、新小説の輪読会、創作経験者の経験発表、レコード鑑賞、ピクニックなど「文芸」にこだわらずひろく文化活動をとりあげ会を大衆的な楽しいものにするを基本方針としていた。

**3月10日（木）**都城小学校で第二回の婦人部小会が開かれた。参加者は永井登美・永井イト・河野・清水・藤崎ハギ・中山タツ子などの7人のようである。この会は自由研究の日であったので永井は小山との相談で満州問題を座談会のテーマにし、そのなかで反戦の方向に話をすすめるつもりでいた。会は最初ブルジョア文学とプロレタリア文学とについての討論からはじまり、やがて戦争の話に移った。そこで中山がかなりはっきりと左翼的な発言をしたという。それからソヴェトについての話も中山から出たという。

**中山タツ子**<sup>25</sup>は、本籍・都城市姫城町で、当時23才、開業医の二女である。文学を好み社会科学

24) 講演会の出席者か結成式の出席者かわからないが50名ぐらいが当初集会に参加したようである。文芸研に組織された人数は40人とも44人ともいわれているがどの位正確かわからない。

25) 前報告の山元証言（63ページ）では、中山あやが文芸研の会員とされているが、聴取書ではあやの名前

にも関心をもっていた。「女人芸術」「プロレタリア詩」などを購読していた。やがて山元がプロ文学などに造詣が深いことを聞き交際するようになり「プロ科」「新教」「働く婦人」などを読むようになった。彼女が山元を知ったのは、中馬敏子が妹と都城高女で同級で親しく、中馬も「女人芸術」を購読しプロ文学などの書籍の貸借をする関係であったので、山元宛の「プロ科」差押へ事件を中馬から聞いたことからだという。彼女はこの文芸研の関係で永井登美とも親しくなるのである。

3月13日、都城中学校で市部会の研究会が行なわれた。これには山元・横山・小山・河野・菊地らが参加しているが内容はわからない。文芸研究会の内容はその組織の性格と結成の趣旨から云って階級的な方向づけをもっているわけではないが、これまでの活動状況からうかがえるように、この階級的運動がより広い大衆と結びつきそれに影響を与える新しい条件をつくりだしつつあった。そしてそれはまたこの運動を弾圧から守りあるいは弾圧をはねかえして運動を再建していく力をつくりだしていくという展望にもつながるものであった。しかし残念にも3月21日という予想以上に早い弾圧の嵐によってこの期待は圧殺されてしまうのである。

## 6. 教労南九州支部の結成へ

「会」は弾圧の危険を感じながら、ある意味ではそれ故に一方では中央の組織と連絡し運動の正しい発展のために指導を求め、他方ではより大衆的な力に守られるべく公然場面を拡大しようとした。すでに「プロ科」支局としてプロ科本部の指導<sup>26)</sup>を参考に文化サークル組織に着手し、7年1月には「新教」支局「Hほ」としての承認も受け、中央との連絡も緊密になってきた。

1月中旬、中央から新教中央アドの弾圧により地方アドに危険が及ぶ可能性があるというレポをうけたが、幸いにして何事もなかった。同じく中旬に待望の「全協一般使用人組合教労部」の機関紙「教育労働者版」が1号から4号まで5部ずつ送られてきた。そのうちの2組は、直前に来たレポで鹿児島県の同志に送るよう指示されていた。3組は支局で読者をきめよということであった。それは「教労」への加入、組織的結合を示唆するもの<sup>27)</sup>である。鹿児島県の同志は、鹿児島県指宿郡知覧村の木原安弥と種子島の島間の名越時夫であった<sup>28)</sup>。レポでは鹿児島県の同志が近いなら連絡をとるようにとあったが、直接会うことが出来ないのそれぞれ郵送することにした。こうして

---

はでてこない。しかしあやさんが当時においては新しい女性として周囲の人々から注目されていたことは事実である。中山三姉妹（長女あや、二女たつ子、三女トキ子）三人とも進歩的な考え方をもっていたようである。

- 26) プロ科からは11月下旬以来ほぼ月1回組織部ニュースが送られてきており、随時カンパニアや支局調査などの連絡もあった。2月には文学サークルの組織・活動方法についてのレポも来たという。
- 27) レポには「文化団体では取次がぬことになっているから、読者がきまったら、そのアドの家庭調査、アドと読者との関係などを報告せよ」と指示されていた。
- 28) 鹿児島県の木原・名越が新教・教労とどのような関係にあったのか不明である。木原は大正末から小作争議にも関係していた社会主義的思想をもった小学校教員で、新興童話作家聯盟にも加盟、「綴方生活」の運動とも関係があった。昭和7年11月7日からはじまる「プロ作家同盟鹿児島支部」に対する大弾圧（総計80名検挙）により検挙、治罪法違反で起訴された。名越時夫については未だ全く不明で、本名であるかどうかも確かめられていない。

山元たちはいよいよ教労結成を考えるようになった。

2月に入り、新教から「警察テロ」についての注意を記した「ニュース」が来た。そして中旬に新教中央から警察の弾圧に対して十分な用意をしておくようにという緊急レポが来た<sup>29)</sup>。それは中央の送本係が警察に検挙されたとき地方からのニュースを腹巻のなかに入れていて処分する余裕がなかったため、ニュースから弾圧の手がかりがつかまれるかも知れないということであった。早速、その夜緊急の会議が召集された。西都城駅近くのブラジル食堂に山元・小山・河野・阿万・山下・津曲が集まり、山元が事情を説明し、弾圧に対する対策が協議された。若し捕まったらどうするかと皆一時は騒然となったが、山元が「余り自分のことばかり考えては駄目だ、支局メンバーとしてどう対処すべきか考えなければならない。第一に被害を拡げないようにすることだ」と、次のようなことにまとまった。組織の存在を知られないように「赤いチョーク」などを処分すること、当分「ニュース」発行を見合わせることで万一検挙されても絶対に組織のことを口外しないこと、「新教」などの出版物は本来合法的な文化啓蒙雑誌なのだから恐れる必要はない。「新教」読者であることを探知されたら「教師だから右も左も知っておく必要がある。自分は読んでいるが内容は感心しない」とつぶねる。そして本社から直接購読していると頑張ること、そして他の色々な活動についてはすべて山元が責任者だということで切り抜けるということになった。山元が責任者になったのには、津曲がこの弾圧についてのレポを聞いたとき自分には他の重要な任務があるし共青にも関係しているので自分の名前は絶対に出さないようにと云ったからであろう。責任者をきめておく必要があったのは文芸研究会との関係であったようである。このときはまだ文芸研の結成準備の過程であった。それで一時はこの活動を中止しようという意見も出た。しかし今更中止するわけにもいかないし、むしろ今こそ大衆的な活動を公然と行う方がよい、この計画、準備の責任を追及されたときには、山元が中心だということにしようまとまったのであろう。この会議の途中、食堂の店員からコーヒー一杯であまり粘られては困ると苦情がでて、怪しまれるといけないうち9時頃に山元宅に移動して会議を続けた。このあと、あまり弾圧のことばかり気にしては駄目だと、前回からの課題である児童自治会の組織化についての実践報告を阿万が行なった。それは子どもたちに自治会の集団的な統制を問題にさせた実践のようである。

2月中は文芸研結成準備とその運営・会員の組織のために皆精力的に活動した。文芸研の組織過程では津曲と山元の間で若干の意見の不一致があったようであるが、その内容はあまりはっきりしない。津曲自身の語るところでは、自分が表面にできることは文芸研自体にとっても得策でないので避けていたが、自分の方針は河野や山元を通じて準備委員会には出していた。それは会員が広汎にわたるから講演会等の形式をとること、市内を各班にわけ責任者をきめて活動する、メンバーは必

29) 1月から2月にかけての関係者の供述内容は全くちぐはぐな点が多い。たとえば、このブラジルでの緊急会議についても1月28日(土)とはっきり日を特定しているものもあれば——ただし28日は木曜である——2月中旬だという供述もある。本部からの弾圧警告のレポが来た時期も、6年12月中旬、1月8～9日、1月上旬、1月中旬、1月下旬、2月上旬、2月中旬とさまざまである。これらの比較検討、前後の関係から推定したのが本文の記述である。



ず会員として加入し、各班とも小会がもたれる場合等に階級的意識を注入するよう努め同志の獲得を期す、というものであったという。これが津曲の方針だとすると大筋においてその方向で進んでいるのである。ところが小山が語るところでは、「津曲が種々積極的な策動に出て、我々の計画が向側に知られる恐れがあったので、山元等は津曲を排斥した様な状態となり、その後、具体的な文化サークル結成の策動は完全に宮崎・山元の手に戻ったようであった」ということであるし、前報での山元の証言でもこれに類することが述べられており、疑問は残る。ともあれ、内部における若干の意見対立<sup>30)</sup>、他方では弾圧の危険の切迫という悪条件<sup>31)</sup>を克服して、文芸研の活動は成功裡に進められた。

**3月13日**（日）都城中での文芸研小会のあと午後4時頃から山元宅で会議が行なわれた。出席者は山元・横山・小山・河野である。小山から文芸研小会での山元の言動が批判された。それは小会の回読誌の決定にあたり山元がはじめから思想的傾向のはっきりしている雑誌を取り上げようとしたことについて、それは一般会員にたいし左翼思想の持主であることを知らせ警戒心をおこさせることになるとして、文芸研におけるメンバーの活動のしかたを問題にしたのである。次いで山元がプロ科・新教の「同盟化」方針との関連で「会」のプロ科同・教労加入の問題を提案した。同盟への加入問題については原則的に異議はなかったようであるが、「会」のメンバー全員が入るかどうか、誰が入るかということも色々検討する必要がある、他のメンバーも含めて考えようということになった。教労加入問題については山元が大衆的な文芸研活動・「会」の活動などを運動全体のなかで指導していくにはどうしても教労の指導をうける必要があることを力説した。しかし他面、教労に入るということはこれまでの「プロ科」「新教」支局などとは質がちがうし、いわゆる非合法組織であるから「会」の決議で皆に強制するというわけにもいかない。それでまず自分だけでも加入して連絡をとりたいと提案した。しかしこれについても山元だけが入るというのも問題だし、またそれは山元だけの問題にとどまらないから、皆で検討しようということになって、20日の会議で結論を出すことになった。

**3月20日**（日）午前10時都城市外五十市村の母智丘神社で会議が行なわれた。出席者は山元・小山・河野・谷口・宮崎である。都城文芸研にたいする「会」としての統一的な方針を明確にするというのが第一の問題であった。山元は文芸研はできたが現状では中学の先生たちの国文学研究の発表機関になってしまう傾向がある。文芸研は全会員の相互的な研究の場でなければならない。会の進むべき方向については我々がヘゲモニーをにぎる必要がある、この問題に対して「会」としてのどのような方針で活動したらよいかと問題をきり出した。文芸研の小会に「文新」をもちこみ、それを

30) 津曲と山元の意見の対立は前報告でも、また本文でも触れたが、横山と山元の間にもしばしば論争が起っているようである。それがどの程度「対立的」であったのかはわからない。

31) 弾圧の危険と家庭の事情（昭和7年2月20日実父が死亡）からであろうが、種子田は2月23日に阿万宛に「研究会との関係を切りたい、自分の立場を解消してくれ」という手紙を出している。この時期にはおそらく誰もがこのような動揺を内心にかかえながらそれを克服して運動をすすめていったと思われる。

手掛りに「新教」「プロ科」の読者を獲得しようという方向については異議はなかったが、実際に「文新」をどうもちこむのか、あまり公然とやるのはどうか、金海堂書店に「文新」を置いてもらって、こういう新聞をみたが読んだ人はいるかという風に切り出そうなど色々と意見はでたが、まとまらなかったようである。次に前回からの協議事項であるプロ科同・教労の支部結成問題が山元から説明・提案された。「同盟」加入については決定したが、その再組織の具体的な内容はきまらなかった。名称、役員、組織の構成—会計部とか印刷部を—おいてはどうか、また名称とからんで地域的にどの範囲で考えるか。日南か、宮崎県か、南九州か、南九州という案に対してそれは鹿児島を含むことになるが鹿児島にも同志はいるのかなど色々と論議されたようである。教労加入問題については山元だけでも加入するというのも含めて全員に図る必要があると再度決定が延期されたという。最後に山元より革命歌の合唱の提案があり全員賛成して「3・15事件記念の歌」などをくりかえし合唱して、午後4時頃会議を終った。

以上は聴取書の記述にみる議論の大筋の流れであるが、各人によってかなりくいちがいがありとくに教労加入問題はあいまいである。教労加入の有無はこの弾圧における攻防の要点であるわけで、この点に関する各人の供述内容の真偽にはわかに判断できない。しかしこの会議の全体としての流れ、1月中旬の「教労版」配布から山元の問題提起、そして20日の母智丘での革命歌の全員合唱というしめくりは、この時点で教労の支部結成にふみきったとみるのが結論として自然ではないかと感じさせるものがある。そのような眼でみると、20日の会議で「プロ科同」支部の名称として議論されている「日南」か「宮崎」か「南九州」かということは、前報の山元証言にあった「全協教労南九州支部」と附合するのであって、「プロ科同」ではなく「教労」結成の決定とその組織構成等の論議であったとみるべきであろう<sup>32)</sup>。この点はもちろん推測にとどまる。目下のところは山元証言や各人の聴取書の供述は相互にくいちがい、そのいずれが真であるかを確定できない。しかし教労「成立」か「成立直前」であったかはともかく、そこまできていた事実<sup>33)</sup>は明白であった。そしてその運動の発展は、3月21日、この会議の翌日早朝にはじまる一斉検挙によってまさに暴力的に阻ばまれたのであった。

32) 前報告に紹介した山元証言はそこで示しているようにほとんど具体的な資料のない時期に記憶のみにもとづいて行なわれている。今回利用している関係者（本人を含めて）の供述の聴取書は知らないで述べられているので、山元証言からそれぞれ供述内容の検討をするという方法（教労結成の事実をどのように隠そうとしているかという観点で読みとる方法）が成立しうらと思うのである。

33) 横山は、自分は以前から教労に加入すべく準備していた、3月20日の会議には風邪のため出席できなかったが、教労支部結成の決議には従う筈であった、と述べている。